

1年365日仕事のことばかり考えている仕事人間の私も、春になると心がふわっと浮き立ってくる。色とりどりの花が咲き初めるからだ。幼いころから夢見がちだった私にとって、花に囲まれる時間は、現実を忘れてロマンチックな気分になれる大切なひとときだ。

桜が咲くととりわけ気もそぞろになる。「早くしないと散っちゃうわよ」と社員をせかし、どんなに忙しくともなるべくみんなで見に出かける。近くは東京の千鳥ヶ淵から遠くは中部、関西まで。夫が大阪の

造幣局長だったときは「桜の通り抜け」にも足を運んだ。満開の桜を飽かず眺めていると、「願わくは花のもとにて春死なむ」と詠んだ西行の境地がわかる気がする。

仕事で行く旅先でも、思いがけない花との出合いは多い。ポルトガルのマデイラ島で見た紫の花吹雪は忘れられない。バルセロナでのファッションショーの前に立ち寄ったこの島で、空港からの道すがら、鮮やかな花をすずなりに付けたジャカラランダの並木道を見つけた。興奮した私は「ここを歩きたい」と言ってタク



ローズユミ
リ京成バラ園芸提供

バラ

シーを降り、胸をときめかせながら並木に近づいていた。見上げると天空いっぱい紫、紫、紫。その花びらが風に舞って乱れ散る景

気品香る新種にひかれる

色は目もくらむほど幻想的だった。

花という花はみな好きだが、ひとつだけと言われれば迷うことなくバラを選ぶ。華やかで上品な風格は、すべての女性のあこがれだろう。婚礼の場にもふさわしく、これまでデザインしたドレスにもバラの刺繍やレースなどを教え切れないくらいあしらってきた。

そんな私のために1998年、千葉県の京成バラ園芸さんが新種のバラに「ローズユミ」の名を付けてくださった。オフホワイトの優しい色調とやや角の張った花びら、気品のある香りを持つ中輪のそのバラは、凜とした強さと美しさをたたえる。

ひと目見た瞬間、自分が思い描いていたバラはこれだと感じ、これ以降、ショーやウェディングの演出に大いに活用してきた。「桂由美といえバラ」。そんなイメージが定着したのも、このバラとの出合いがあったからだ。